

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 健康行動変容を促す他者との関係性の進化
—共鳴型他者介入に関する実践的研究—

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2013-12-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 躰,素代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3551

氏名(本籍)	畷 素代 (奈良県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博課第485号
学位授与年月日	平成23年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	健康行動変容を促す他者との関係性の進化 - 共鳴型他者介入に関する実践的研究 -
論文審査委員	(委員長) 教授 佐久間 春夫 教授 藤原素子 教授 井上 洋一 教授 成瀬九美 教授 麻生 武

論文内容の要旨

本論文は、心身ともに自ら健康をコントロールできる力が求められる女子大学生の健康観を Health Locus of Control という信念体系から捉え、若者の HLC の構築要因と介入のキーパーソンを明確にし、キーパーソンによる実践的介入が健康行動変容にもたらす効果を検証したものである。

第Ⅰ部では、第1章において、女子大学生がもっている健康イメージと健康イメージの構築要因を、質的調査法の1つであるフォーカスグループインタビュー法を用いて明らかにし、第2章では、第1章において明らかとなった健康イメージの構築要因の中から生活経験に関連するものを抽出し、質問紙調査によって女子大学生の HLC と生活経験・健康行動との関連性を検証した。その結果、女子大学生は、健康に関する「自己経験」「他者経験」「身体的知覚」によって、「元気・パワー」「生活が楽しい」「心が病んでいない」「普通の状態」という健康イメージを構築していることが明らかとなった。また、女子大学生の HLC は、過去の生活経験において影響を及ぼした家族や身近な人が他者統制に関連し、他者統制が健康行動の保持に関連することが明らかとなった。第1章および第2章の結果から、若者の HLC を再構築できる介入のキーパーソンは、家族や身近な人であると結論づけた。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部の結果を踏まえて、若者の身近な存在である仲間(ピア)をキーパーソンとした実践的介入を行い、ピアによる実践的介入がもたらす効果を検証した。効果の検証は、一定のト

レーニングを受けたピアサポーターによる介入と、仲間同士の関係による介入とに分けて行った。

ピアサポーターによる介入については、第3章において、ピアサポートの定義と歴史的背景について述べ、ピアサポートに関する先行研究の問題点を指摘した。第4章では、ピアサポーターの心理的特性を自尊感情および自己効力感の測定結果から論述した。第5章では、ピアサポート活動がもたらす効果を、第1節では対象者側から、第2節では介入者側から検証した。第3節では、ピアサポーターが「うまくできた」と発言した活動と「うまくできなかった」と発言した活動との比較から、ピアサポーターが対象者と関係性を構築していくプロセスの特徴を明らかにした。その結果、ピアサポートでは、ピアサポーターが対象者からの発信を受け入れるのではなく、ピアサポーターからの発信を対象者が受け入れるという関係性が成り立っており、ピアサポーターが能動的に感情発信していくことで、対象者への感情の連続性が生起されていることが明らかとなった。

仲間同士の関係による介入については、第6章において、フォーカスグループインタビュー場面を女子大学生に健康行動変容を促す実践的介入と捉え、インタビュー場面における場面の秩序を数値化した量的データと、言葉の意味解釈の質的データの両面から、仲間同士の関係が健康行動変容にもたらす効果を検証した。その結果、メンバーによる深層的言語と感情的言語による振動がグループ内に共鳴を生起し、メンバー間の関係性を進化させ、健康行動変容の前段階である健康価値変容を促すことが明らかとなった。

結章では、第I部と第II部の結果を、相互性のある健康観の特徴と健康行動変容を促す他者との関係性という観点から総合的に考察した。相互性のある健康観の特徴については、個人と社会の相互作用による健康という健康文化論の観点を踏まえながら考察し、健康行動変容を促す他者との関係については、仲間（ピア）を他者間レベルの健康行動変容を促す他者、グループインタビューの進行者を集団レベルの健康行動変容を促す他者として位置づけ、他者間の関係性が進化する共鳴型介入によって健康行動変容が促される可能性を示唆した。さらに、集団レベルの健康行動変容を促す他者の役割を対象者の主体性を引き出すエンパワメントの観点から考察した。

本研究の結果は、深層的言語と感情的言語による振動が健康価値の共鳴を起こし、介入者と対象者の関係性が進化することで相互性のある健康観を構築していくことができる、ということに総括することができる。

論文審査の結果の要旨

健康は自らの力だけでコントロールできるものではなく、他者の介入を受け入れることも必要である。しかしながら、介入することが介入される側の健康行動変容にまで影響を及ぼすことは難しく、その関係性についてはこれまでに個人レベル、他者間レベル、集団・社会的レベルで研究がなされている。

本論文は、心身ともに自ら健康をコントロールできる力が求められる女子大学生の健康観を Health Locus of Control (HLC) という信念体系から捉え、若者の HLC の構築要因と介入のキーパーソンを明確にし、「他者」であるキーパーソンによる実践的介入が健康行動変容にもたらす効果を検証したものである。

本論文はⅡ部から構成される。

第Ⅰ部では、第1章において、女子大学生がもっている健康イメージとそれらの構築要因を、質的調査法の1つであるフォーカスグループインタビュー法を用いて明らかにした（奈良体育学会研究年報第11号掲載、奈良女子大学スポーツ科学研究第9、10号掲載、奈良女子大学人間文化研究科年報第24号掲載）。第2章では、第1章において明らかとなった健康イメージの構築要因の中から生活経験に関連するものを抽出し、質問紙調査によって女子大学生の HLC と生活経験・健康行動との関連性を検証した。その結果、女子大学生は、健康に関する「自己経験」「他者経験」「身体的知覚」によって、「元気・パワー」「生活が楽しい」「心が病んでいない」「普通の状態」という健康イメージを構築していることが明らかとなった。また、女子大学生の HLC は、過去の生活経験において影響を及ぼした家族や身近な人が他者統制に関連し、他者統制が健康行動の保持に関連することが明らかとなり、第1章および第2章の結果から、若者の HLC を再構築できる介入のキーパーソンは、家族や身近な人であると結論づけた。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部の結果を踏まえて、若者の身近な存在である仲間（ピア）をキーパーソンとした実践的介入を行い、一定のトレーニングを受けたピアサポーターによる介入と、仲間同士の関係による介入がもたらす効果を比較検証した。

ピアサポーターによる介入については、第3章において、ピアサポートの定義と歴史的背景について述べ、ピアサポートに関する先行研究の問題点を指摘した。第4章では、ピアサポーターの心理的特性を自尊感情および自己効力感の測定結果から論述した（奈良女子大学スポーツ科学研究第11号掲載、日本地域看護学会誌第13号掲載予定、British Journal of Community Nursing 掲載予定）。第5

章では、ピアサポート活動がもたらす効果について、第1節では対象者側から検証し、第2節では介入者側から検証した。第3節では、ピアサポーターが「うまくできた」と発言した活動と「うまくできなかった」と発言した活動との比較から、ピアサポーターが対象者と関係性を構築していくプロセスの特徴を明らかにした。その結果、ピアサポートにおいては、ピアサポーターが対象者からの発信を受け入れるのではなく、ピアサポーターからの発信を対象者が受け入れるという関係性が成り立っており、ピアサポーターが能動的に感情発信していくことで、対象者への感情の連続性が生起されていることが明らかとなった。(家族と健康649掲載、奈良女子大学人間文化研究科年報第25号掲載)。

第6章においては、フォーカスグループインタビュー場面に女子大学生に健康行動変容を促す実践的介入と捉え、インタビュー場面における秩序を数値化した量的データと、言葉の意味解釈による質的データの両面から、仲間同士の関係が健康行動変容にもたらす効果を検証した。その結果、メンバーによる深層的言語と感情的言語による振動がグループ内に共鳴を生起し、メンバー間の関係性を進化させ、健康行動変容の前段階である健康価値変容を促すことが示された(奈良体育学会研究年報第11号掲載、奈良女子大学スポーツ科学研究第9号掲載)。

結章では、第I部と第II部の結果を、相互性のある健康観の特徴と健康行動変容を促す他者との関係性という観点から総合的に考察した。相互性のある健康観の特徴については、健康行動変容を促す他者との関係について、仲間(ピア)を他者間レベルの健康行動変容を促す他者、グループインタビューの進行者を集団レベルの健康行動変容を促す他者として位置づけ、他者間の関係性が進化する共鳴型介入によって健康行動変容が促される可能性を示唆した。さらに、集団レベルの健康行動変容を促す他者の役割を対象者の主体性を引き出すエンパワメントの観点から考察した。

以上、本研究でみられた共鳴型他者介入が、これからの社会において個人の健康価値変容、さらには健康行動変容を促す可能性を持つことが示された。本研究の結果は、深層的言語と感情的言語による振動が健康価値の共鳴を起こし、介入者と対象者の関係性が進化することで相互性のある健康観を構築していくことができることを実践的に証明した点で高く評価することができる。

なお、本論文の内容は日本地域看護学会誌に掲載予定である他、奈良体育学会研究年報、奈良女子大学スポーツ科学研究、思春期学など計8篇掲載されている。また British Journal of Community Nursing にも掲載予定であり、本専攻の学位取得基準を充たすものである。

よって、本学位論文は、奈良女子大学博士(学術)の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断された。